

古今和歌集における七夕歌の配列について

水谷 隆

A Study on the Arrangement of Tanabata Poems in *Kokin Wakashu*

MIZUTANI Takashi

一、問題の所在

古今和歌集四季の部の歌の配列

古今和歌集の四季の歌を収めた巻々には、周知のように、季節の推移の順に歌が配列されている。しかし、それらのうちには時間が逆行しているように見える例がしばしば存する。

たとえば、古代の和歌において、その鳴き声でもって春の訪れを告げる鳥とされる鶯は、古今和歌集で、

題しらず

梅がえにきあるうぐひす

よみ人しらず

はるかけてなけどもいまだ雪はふりつつ

雪の木にふりかかれるをよめる 素性法師

春たてば花とや見らむ白雪のかかれる枝にうぐひすぞなく

(¹古今和歌集 春上 五・六)

のように、雪の中でその声を聞かせる。ところがこれらの歌のしばらく後に、

春のはじめによめる ふちはらのことなほ

はるやとき花やおそきとききわかむ

鶯だにもなかずもあるかな

はるのはじめのうた みぶのただみね

春きぬと人はいへども

うぐひすのなかぬかぎりはあらじと思ふ

(古今和歌集 春上 一〇・一一)

と、まだ鳴かぬ鶯を詠んだ歌が配される。

またたとえば、右に示した一〇番の歌のように、なかなか咲かぬ梅を待ちわびる心情を詠んだ歌が春の初めに配されているが、春に先立つ季節である冬の部に、

梅花にゆきのふれるをよめる 小野たかむらの朝臣

花の色は雪にまじりて見えずとも

かをだにはへ人のしるべく

雪のうちの梅花をよめる

きのつらゆき

梅のかのふりおける雪にまがひせば

たれかことごとわきてをらまし

(古今和歌集 冬 三三五・三三六)

と、雪の中ですでに開花している梅の花の歌が見られる。

ここで確認しておきたいのは、こうした、時間の逆行とみえる現象の多くは、松田武夫氏が提唱された「主題」ごとの配列という考え方で説明できることである。今、氏の説が簡潔にまとめられた『新釈古今和歌集』（風間書房 一九六八年）から、主題ごとの配列について説明された部分を引用する。

四季の部立内を、一月から十二月までに分割思考し、さらに

各月に主題（それは、小見出し的な、歌集に統一をもたらすための一種の包括的概念であるが）を設定し、その主題に見合う歌を、それぞれ、その統括下に配置するものである。その主題の配置は、時間的推移により、自然現象の中から、事物現象名を選択採用して、主題名とした。その主題が、梅・桜・山吹・紅葉の如き、季節の花葉である場合には、咲く花の歌群・散る花の歌群といったように、また、それが、鶯・郭公などのような鳴鳥である場合は、鳴く前の鳥・鳴く鳥・七夕のような伝説的で擬人化された如き主題においては、恋歌の主題配置と等しく、待つ七夕・会う七夕・別れる七夕と、すべて時間的推移を軸とし、基盤として、同類同種の歌を集合配列して狂いがない。

古今和歌集がこのような方針で編集されているため、別の主題の歌群の中にたまたま同じ景物を詠んだ歌がある場合、その時間が逆行して見えることがある。そのような説明が可能なのである。右の、鶯の例で言えば、五・六番の歌は「立春」、一〇・一一番の歌は「鶯」という主題のもとにまとめられたものである。そう考えると、五・六番の歌は立春の主題のもとに配列されたものであるが、その中にたまたま鶯が詠み込まれているために、鶯の初音のタイミングに着目した場合、結果として一〇・一一番の歌と時間の逆行が生じた、と説明できる。同様に、冬部に見える梅花の歌も、「雪中梅花」という主題のものであり、松田氏の説明を

借りれば「雪中梅花」といっても、冬の主題としては、梅花を主としたものでなく、飽くまでも雪を主とする」、冬部に配するのにふさわしい歌なのである。ただ、それが梅花を詠むものでもある結果として、梅花そのものを主題とした春部の歌と時間的に逆行することになる。

古今和歌集四季の部の時間が逆行していると見える歌の配列については、ほとんどの場合、右のように考えて説明がつく。しかしながら、それでもなお、この考え方で説明しきれない例がわずかながら残る。本稿では、そのような例のうちから、とりわけこの考え方で説明が難しいと思われる秋部冒頭の七夕歌群を取り上げて、その内実を検討したい。そのことで、古今和歌集における七夕歌の配列について従来とは異なる理解の可能性を提示できると思うからである。またひいては、古今和歌集四季部の歌の配列のあり方について考える上での、いささかの示唆が得られるものとも思う。

二、古今和歌集秋部七夕歌の配列について

古今和歌集秋部に収められた七夕の歌は次の十一首である。今、便宜的に通し番号を付して示す。

(題しらず)

①秋風の吹きにし日より

よみ人しらず)

久方のあまのかはらにたたぬ日はなし

②久方のあまのかはらのわたしもり

君わたりなばかちかくしてよ

③天河紅葉をはしにわたせばやたなばたつめの秋をしもまつ

④こひこひてあふ夜はこよひ

あまの河きり立ちわたりあけずもあらなむ

寛平御時、なぬかの夜うへにさぶらふをのことも歌たてまつれとおほせられける時に、人にかはりてよめる

とものり

⑤天河あさせしら浪たどりつつ

わたりはてねばあけぞしにける

おなじ御時きさいの宮の歌合のうた 藤原おさかぜ

⑥契りけむ心ぞつらき

たなばたの年にひとたびあふはあふかは

なぬかの日の夜よめる

凡河内みつね

⑦年ごとにあふとはすれど

たなばたのぬるよのかずぞすくなくりける

⑧織女にかしつる糸の打ちはへて

年のをながくこひやわたらむ

題しらず

そせい

⑨こよひこむ人にはあはじ

たなばたのひさしきほどにまちもこそすれ

なぬかの夜のあかつきによめる

源むねゆきの朝臣

⑩今はとてわかるる時は天河わたらぬさきにそでぞひちぬる
やうかの日よめる
みぶのただみね

⑪けふよりはいまこむ年のきのふをぞ

いつしかとのみまちわたるべき

(古今和歌集 秋上 一七三～一八三)

まず、それぞれの歌に描き出された時間を確認するところから始めたい。

①は「秋風の吹きにし日」が具体的にいつのことなのか、明確にするのは難しいが、七月七日以前の、秋風が吹き始めた日から、彦星の来訪する七日より前までの間のいずれかの時点を描いたものと考えられる。

②は歌句だけに依れば、彦星の渡河以前ということ以外に描かれている時間を特定することはできない。極端に言えば、秋以外の季節であっても逢瀬の最中以外であればいつでも「君渡りなば」という表現は成立しうる。しかし、やはり渡し守に梶を隠すよう懇願するのは、彦星の渡河を間近に控え、彼を迎えるために心浮き立たせながら用意をするタイミング、すなわち七日の、まさに宵を迎えようとしている時とみるべきであろう。

③も②と同様、歌集の配列を考えず理屈だけで言えば、この歌が示す時間をいつと定めることはできない。ただ、枝から舞い落ちた紅葉が川に落ちるのは、

竜田河もみぢみだれて流るめりわたらば錦なかやたえなむ

(古今和歌集 秋下 二八三)

たつた河もみぢば流る神なびのみむろの山に時雨ふるらし

(同 二八四)

のように、晩秋のこととして古今和歌集では示される。したがってこの歌は、紅葉が舞い落ちる川を眼前にして天の川の秋を想起した体の歌ではなく、秋になって、それが二星の逢瀬の季節であり、また紅葉の季節でもあると意識した際の歌と理解するのが穏当であろう。ならば、③は、秋の訪れを意識した日、もしくは、七月七日を意識し始めるだろう七日間近の歌であり、今まさに彦星が渡河しようとするタイミングでの歌であった②よりも時間的には前に位置すべきものと考えられる。

④は「会ふ夜は今宵」とあることから、七日の朝から「宵」以前の状況を描いた歌であることは明らかである。ただし、それが「宵」の直前なのか、時間的に余裕のある朝から昼間のことなのかを定めることは、歌句からだけではできない。

⑤は「明けぞしにける」という歌句からすれば、七日の夜の明けた、八日の朝を描いたものであることが明らかである。ただし詞書に依れば、これが詠まれたのは歌句の指し示す時間とは異なる、七日の夜間である。この状況を踏まえて説明するならば、歌句が示す時間は「七日の夜の暁」を描く⑩以降のものということになり、時間が逆行していると考えざるを得ない。一方で、詞書

に記された詠歌の時間は七日の夜であり、④と⑥の間にそのまま位置づけることができる。すなわち時間的な逆行はない、ということになる。古今和歌集において、この歌の時間を歌句と詞書のどちらで理解すべきかについては、後に言及するが、今は、この歌の配列に時間の逆行が生じていると取り得ることを確認しておきたい。

⑥は二星の一年ぶりの逢瀬に思いをいたし、そのありようを評価した歌、すなわち、七日の夜を間近にした時から、七日の夜中の、まさに逢瀬の最中までの時間のいずれかの詠と見るのが自然であろう。

⑦は⑥に呼応する内容であり、歌句に依るならば、⑥と同じく七日を間近にした日から七日の夜までの間のいずれかの時点を描いたものである。ただし、詞書は「七日の夜」の歌と時間を限定する。

⑧も、前二首と同様、織女のために飾り付けた美しい糸を眼前にした人の、飾り付けを終えてからその日の夜中までの間の歌と考えられるが、これも詞書によって「七日の夜」と時間が限定されている。

⑨の「今宵」は明らかに七月七日の夜のことである。そして「来む」という表現に注意するならば、これは、七日の朝から「宵」すなわち、夜更け以前までの間の歌ということになる。ただし、⑥⑦⑧の歌に次いで配されていることを前提に見れば、この歌の表す時間は七日の早い時点ではなく、逢瀬の時である

「宵」と捉えられることになるだろう。そして、この歌から遡って考えれば、⑥⑦⑧の歌もこれと同様「七日の夜」の中でも比較的早い、すなわち、二星が一年ぶりに再会した「宵」のものと見ることになる。また、そのように見て、それぞれの歌句との矛盾は生じない。

⑩は「今はとて別るる」から、まさに詞書に記された「七日の夜の暁」の時点を詠んだ歌である。

⑪の「昨日」が七日であることは明らかなので、八日時点の歌である。ただ、八日になってすぐの、言い換えれば、七日の夜が明けた時点の歌とみた方が「今日よりは」に込められた感慨が深くなると思われる。

以上のように、古今和歌集秋部の七夕歌は、二カ所において時間の逆行と見うる配列がなされている。すなわち、歌の示す時間順にこれら七夕歌を並べるならば①③②④⑥⑦⑧⑨⑩⑤⑪（ただし、⑤の歌を詞書に従って「七日の夜」の歌とみるならば、①③②④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪となり、時間の逆行は一カ所ということになる。）となっているのである。

この時間の逆行について、松田氏の「主題」による配列、という考え方で説明することは難しい。氏によると古今和歌集秋部の七夕歌は、①③が「待つ七夕」、④⑨が「会う七夕」、⑩⑪が「別れる七夕」の主題の元にまとめられたものである。初めに見た鶯や梅のように、主題をまたがって同じ素材が詠まれている場合、時に、時間が逆行した形で歌が配されることはあった。しか

し、七夕歌は、主題ごとに区切って示すと①③②／④⑥⑦⑧⑨／⑩⑤⑪のようになり、⑤は、主題をまたがると言えるが、③の歌については、同じ主題^⑦の中で時間の逆行となってしまう。

では、どのように説明するか。本稿では、古今和歌集秋部の七夕歌の「主題」そのものを捉え直すことで、それが可能となると考える。

三、古今和歌集の時代における七夕歌の認識

貫之集に次のような屏風歌がある。

七月七日

たなばたにぬぎてかしつるから衣いとど涙に袖やくちなむ

(貫之集 一二)

たなばた

秋風によの更行けばあまの川河瀬に波の立ちあこそまで

(同 一三)

家集の詞書に依れば、これは延喜六年に制作された月次屏風のたぬに献上されたものである。注目したいのは「七月七日」と「たなばた」とが区別されていることである。なお、ここには歌仙家集本を底本とする新編国歌大観の本文を示したが、同じ屏風の歌を伝える西本願寺本では、十二番の歌の前に「たなばた」とあ

り、十三番の歌には詞書が付されない。後で述べるように、平安時代の和歌資料において、「七月七日」と「たなばた」を別のものとしてあつかう例があまりないことからすれば、もともとの本で十二番と十三番が「たなばた」という詞書で一括して示されていたものが、筆写の過程で「七月七日」と「たなばた」に区分されるかたちで改編された可能性は極めて低い。すなわち、もともとの貫之集、あるいはその原資料に「七月七日」「たなばた」とあったものを、同じものとしてまとめてしまったのが西本願寺本の本文であるという蓋然性の方がはるかに大きい。^⑧すなわち、少なくとも延喜六年の屏風が制作された場においては、「七月七日」と「たなばた」とは、歌の題として別のものとの認識があったのである。

さらに、こうした認識が延喜六年の屏風歌だけのものではなかったことも推測される。やや説明が煩瑣になるが、以下、順を追って記す。まず着目したいのは、今あげた貫之集延喜六年の屏風で「七月七日」として示される歌が「たなばたに脱ぎて貸しつる唐衣」とあるように、織女でも牽牛でもない、星祭りの様子を見ている第三者の立場からの詠であり、一方「たなばた」として示された歌は、天の川の川瀬に「立ち居」して待つ、という織女本人の立場での詠と取れることである。このように「七月七日」とは二星の逢瀬を第三者の立場から詠むものの、「たなばた」は当事者の立場で詠むものと仮定した上で、同時代の和歌資料を搜索すると、該当例はほとんどないものの、伊勢集に同様の説明が可能

と思われる例が見いだせる。新編国歌大観所収の伊勢集⁹には、七夕そのものを題にして詠んだ歌として、「七月七日」という詞書を持つ、

(后宮五十賀御屏風内裏し給ひし)

七月七日たらひにみづいれて影みるところ

めづらしくあふたなばたは

よそ人も影みまほしき物にざりける

(伊勢集 八三)

七月七日

こひこひてあはむとおもふゆふぐれは

たなばたつめもかくやあるらん

(同 一二三)

および、「たなばたの絵に」という詞書を持つ歌

たなばたのゑに

ありとだにかたみにみえぬものならば

わするるほどもあらましものを

(同 二八三)

が存する。八三番の歌は、「会ふたなばた」という客観的表現、二二三番の歌は、「たなばたつめもかくやあるらん」という現在推量の助動詞を用いた表現から、どちらも明らかに第三者の立場からの詠である。一方、二八三番の歌は、屏風か何かに描かれた

絵を見て詠まれた歌であるが、当事者の立場に立って、互いに相手のことを忘れられない苦しみをうたったものである¹⁰。つまり先ほど示した、「七月七日」は、第三者の立場での詠、「たなばた」は、当事者の立場での詠、との仮定に伊勢集の例は当てはまると思われる。

この例の他に、「七月七日」と「七夕」を区別して詠み分けたと明らかに言える例はなかなか見いだせないが、こうした認識は貫之集の延喜六年の屏風に限定される特殊事例だったのでなく、この時代の人々に一定程度は共有されていたものだった可能性が想定できるのではないか。

四、古今和歌集秋部七夕歌の「主題」について

右の想定に基づいて、古今和歌集秋部の七夕歌を、詠歌主体に留意しながら再確認したい。

(題しらず)

よみ人しらず

①秋風の吹きにし日より

久方のあまのかはらにたたぬ日はなし

は「立たぬ日はなし」という表現を見るに、第三者が織女の様子を見て詠んだという理解を否定し去ることはできないが、織女自身の立場でもって、今日まだはあなたがいらっしゃる日ではないと

わかつていますが、はやる気持ちを抑えきれず、この河原に立つてあなたの姿を待ちわびています、という浮き立つ気持ちを詠んだものと見る方が妥当と思われる。

② 久方のあまのかはらのわたしもり

君わたりなばかちかくしてよ

は渡し守に直接呼びかける織女の立場の歌であることが「君」という言葉から読み取れる。

③ 天河紅葉をはしにわたせばやたなばたつめの秋をしもまつ

は明らかに織女のことを第三者の立場で推測した体の歌である。

④ こひこひてあふ夜はこよひ

あまの河きり立ちわたりあけずもあらなむ

これも①と同様、第三者詠と理解する可能性がないわけではないが、どうか、今宵は明けないで欲しい、と願う当事者の思いをその立場で詠んだ歌とみるのがよりふさわしいと思われる。

寛平御時、なぬかの夜うへにさぶらふをのことも歌たてまつれとおほせられける時に、人にかはりてよめる

とものり

⑤ 天河あさせしら浪たどりつつ

わたりはてねばあけぞしにける

は「明けぞしにける」と、天の川を渡ろうと苦心するうちに、夜が明けてしまったことを嘆く当事者の詠と見るべきである。

おなじ御時きさいの宮の歌合のうた 藤原おさかぜ

⑥ 契りけむ心ぞつらき

たなばたの年にひとたびあふはあふかは

は「たなばたの年に一度会う」ことを、第三者の立場で評価したものである。

なぬかの日の夜よめる

凡河内みつね

⑦ 年ごとにあふとはすれど

たなばたのぬるよのかずぞすくなかりける

は⑥と同じく、七夕の逢瀬のありようを第三者が判断した歌である。

⑧ 織女にかしつる糸の打ちはへて

年のをながくこひやわたらむ

も「織女に貸しつる」から、明らかに第三者の立場の歌であることがわかる。

題しらず

そせい

⑨こよひこむ人にはあはじ

たなはたのひさしきほどにまちもこそすれ

も同じく、七夕の逢瀬を話題にした地上の恋人たち、すなわち第三者の歌である。

なぬかの夜のあかつきによめる

源むねゆきの朝臣

⑩今はとてわかるる時は天河わたらぬさきにそでぞひちぬる

は「袖ぞひちぬる」とあるように、別れに臨んで涙を流す当事者の詠と見るのが適当と思われる。

やうかの日よめる

みぶのただみね

⑪けふよりはいまこむ年のきのふをぞ

いつしかとのみまちわたるべき

については、現行の古今和歌集注釈類では当事者の立場の歌とみるものが多いが、こうした解釈は、

古来織女の意中を此方より推察した作のやうに解釈してあるが、当たらない。前の歌どもを見るがよい。さうした趣のは、皆歌に「棚機」とことわつてあるではないか。そのことわりのないのは、皆牽牛又は織女の身になつて詠んだものである。ここも後ろの方の意である。

とした金子元臣の説が発端となつたものらしく、それ以前は、

タナバタ様ハサゾ。今日カラシテハ。又今カラ来年ノ七月七日昨日ヲサ。イツカクトヒタスラ待テ月日ヲタテサツシヤルデアラウト思ハレル。

(本居宣長『古今和歌集遠鏡』)

のように、第三者の立場での詠とするのが一般的であつた。現在では古注の理解を積極的に支持する説はないようだが、歌句を見る限りにおいては、どちらとも決することはそもそもできないものである。

以上に確認した古今集秋部七夕歌の歌主の立場を一覧すれば次のようになる。

①②

当事者詠

③

第三者詠

④⑤

当事者詠

⑥⑦⑧⑨ 第三者詠

⑩ 当事者詠

⑪ 不明(両説あり)

さて、先ほど貫之集の屏風歌を手がかりに「七月七日」は第三者の詠、「たなばた」は当事者の詠という、別の歌題だったのではないかと仮定したが、⑪番の歌を古注の説で理解した上でこの仮定を当てはめ、七夕歌の構造を再度整理して示せば、

待つ七夕(当事者詠) ①②

待つ七夕(第三者詠) ③

会う七夕(当事者詠) ④⑤

会う七夕(第三者詠) ⑥⑦⑧⑨

別れる七夕(当事者詠) ⑩

別れる七夕(第三者詠) ⑪

と整然としたものであることがわかる。

初めに指摘した七夕歌における時間の逆行を、この構造で理解するならば、②よりも以前の時間を詠んだものであることを確認した③の歌は、②とは別の「主題」のものであり、そのため、②③で時間の逆行が生じたのは「主題」による配列のため、という説明ができることになる。また、⑥～⑨よりも後の時間を詠んだとも見て取れる⑤の歌についても、同様の説明が可能となる。す

なわち、

天河あさせしら浪たどりつつわたりはてねばあけぞしにける

は、渡河のプロセス、即ち当事者が「会う」という行為の範疇のものであり、そのように見る場合「会う七夕(当事者詠)」の主題の歌ということになる。この歌の内容は、直後に配された⑥⑨の歌よりも後の時間でのものではあるが、⑥⑨は「会う七夕(第三者詠)」という別主題のものであるから、主題を優先した配列原理に依る以上、⑥の前に置くことができる、ということである。

なお、古今和歌集撰者でもある紀貫之がその晩年に編んだ新撰和歌では、秋部の七夕歌は次のように配列される。こちらも便宜的に通し番号を付して示す。

1 こひこひてあふ夜はこよひ

あまの川きり立ちわたりあけずもあらなん
2 こよひこむ人にはあはじ

たなばたのひさしきほどにあへもこそすれ
3 あきかぜに夜のふけゆけば

天の川かはせになみのたちゐこそまで
4 ちぎりけむ心ぞつらき

七夕のとしにひとたびあふはあふかは

5としごとにあふとはすれど

七夕のぬる夜のかずぞすくなかりける

(新撰和歌 春秋 14~22)

1は古今集④の歌であり、当事者詠と受け取るべきものと考え
る。時間的には「会ふ夜は今宵」という歌句から、七日の日暮れ
前と考えられる。

2は古今集⑨の歌であり、第三者詠。「今宵来む」から、これ
も七日の日暮れ以前の歌である。

3は貫之集13番に「たなばた」として収められた歌であり、当
事者の立場でのものである。「夜の更けゆけば」から、七日の夜
に入ってから歌ということがわかる。

4は古今集⑥の歌であり、第三者の詠。二つ星の交合に思いを
馳せながら詠んだものであり、七日の夜の歌とみることができ
る。

5は古今和歌集⑦の歌で、第三者詠。これも4と同様、七日の
夜の歌とみられる。

以上を踏まえれば、新撰和歌秋部の七夕歌の構造は

七日の日暮れ前(当事者詠) 1

七日の日暮れ前(第三者詠) 2

七日の夜(当事者詠) 3

七日の夜(第三者詠) 4・5

と、古今和歌集と同様であることがわかる。このことも、古今和
歌集が七夕の歌を当事者の立場によるものと、第三者の立場によ
るものとで区別していたことを示す状況証拠になるだろう。

以上のように、本稿では古今和歌集秋部の七夕歌を、先ほど述
べたような構造を持つものと考えるが、こうした構造を持つ配列
は、後撰集以後の勅撰集、あるいは新撰和歌を除く私撰集の類に
搜索範囲を広げても確認・想定することはできない。それは、す
でに指摘¹²⁾されているとおり、万葉集においては比較的多く詠まれ
ていた当事者での立場の七夕歌が、平安時代に至って次第に減少
し、第三者の立場での歌に取って代わられるという歴史的な経緯
があった。そのため、当事者詠と第三者詠とを区別する意識、あ
るいは必要が失われていったためと想定されよう。すなわち、古
今和歌集秋部の七夕歌に両者の区分が見られるのは、その過渡期
的な状況を反映したものとして、得心がいく。

五、付説 古今和歌集の配列の原理について

本稿では古今和歌集一七七番の歌

寛平御時、なぬかの夜うへにさぶらふをのことも歌たて

まつれとおほせられける時に、人にかはりてよめる

とものり

天河あさせしら浪たどりつつわたりはてねばあけぞしにける

について、詞書に示された「七日の夜」の歌なのか、歌句から読み取れる八日の明け方の歌なのか、判断を保留してきた。それは、どちらで理解しても古今和歌集秋部七夕歌の「主題」に「当事者詠」「第三者詠」という区別をおけば、時間の逆行という問題が解消するからであった。しかし、詞書に示された時間と歌句から読み取れる時間が異なるということ自体をどのように考えれば良いのか。

いうまでもないが、古今和歌集の詞書は撰者たちが編纂時に用いた原資料そのままとは限らない。たとえば、貫之集に

あるじうせたる家に桜の花をみてよめる

色もかも昔のこさににほへども植えけん人のかげぞ恋しき

(貫之集 七七〇)

と、桜の花に託して故人を哀惜する情を詠んだ歌として収められているものが、古今和歌集では

あるじ身まかりにける人の家の梅花を見てよめる

つらゆき

色もかも昔のこさににほへどもえけむ人の影ぞこひしき

(古今和歌集 哀傷 八五二)

のように、梅の花を詠み込んだ形となっている。おそらく「まう

せたる家」に咲いていたのは桜の花で、その実景を貫之は歌にした。それが家集の、いわばオリジナルの形であった。しかし、歌句に「色も香も」とあることとの釣り合いを考慮すれば、当時の和歌においてその香に言及されることのほばない桜の花を詠んだ歌であるよりは、もっぱら香がもてはやされる梅花の歌であるほうがふさわしい。撰者たちはそのように判断して、古今集編纂時に、もとは「桜」とあったのを「梅」に改編したものと考えられる。そのように考えなければ当時一般的ではない桜の香を詠んだ歌が貫之集に存在する理由が説明しがたいからである。このように、古今和歌集の編纂時には、同集のものとしてふさわしくなるよう、必要に応じて詞書も改編するのが撰者たちの方針であった。ならば、一七七番の歌で詞書と歌句に示された時間に相違があるうとも、それは、古今和歌集としてこの形がよいという判断の結果と考えられる。つまり、古今集撰者たちは、一七七番の歌を、七日の夜に詠まれた八日の明け方の歌、と認識しているのである。このことを確認した上で、再び古今和歌集秋部の七夕歌の配列を示したい。

待つたなばた(当事者詠) ①②

待つたなばた(第三者詠) ③

会うたなばた(当事者詠) ④⑤

会うたなばた(第三者詠) ⑥⑦⑧⑨

別れるたなばた(当事者詠) ⑩

別れるたなばた(第三者詠) ⑪

さて、⑤の「天の川浅瀬しらなみたどりつつ」の歌の、それが八日の明け方の状況を詠んだものであることを重視するならば、「別れる七夕(当事者詠)」の一首目、⑩の前におくことも可能であろう。しかし撰者たちはそのようにはせず、「会う七夕」の歌群に配したのである。これは、当該歌の歌句ではなく詞書の内容の方を基準として配列を定めた、ということ、つまり、たなばたの夜という場において詠まれたことを基準にして、この歌の古今集における位置を定めたことを意味する。

本稿は、古今和歌集四季の部における和歌の配列原理として、松田氏の提唱した「主題」による配列という考え方に賛同するものである。ただし、その「主題」は、個々の歌にどのような「事物現象」が詠まれているかではなく、どのような場で詠まれた歌なのかという観点で捉えなおすべきなのではないか。たとえば、今回取り上げた七夕歌の場合であれば、七夕の種々相を詠んだ歌がここに集められているのではなく、たなばたを詠む種々の場を構成するのにふさわしい歌が集められていると見るのである。古今和歌集の詞書が「和歌の披講の場の生き生きとした雰囲気をもそのままに再構成している」^⑬ように書かれていることは、すでに指摘されているところである。古今和歌集四季の部の配列は、まさにこの「披講の場」を「主題」として、時間の順に配列されているのではないか。そしてそれは「いにしへの世世のみかど春の花

のあした秋の月の夜ごとにしぶらふ人人をめしてことにつけつうたをたてまつらしめたまふ」と、仮名序が君臣の理想像として示した和歌の場のありようを再現しようとしたものなのではないか。

この想像を裏付ける傍証として、新撰和歌における歌の配列を示しておきたい。たとえば、藤原定国の四十賀のために用意された「四季の絵」を描いた屏風の歌々を、古今和歌集ではそれらが詠まれた場を基準に賀の部(三五六―三六四)に収める。これらのうち、春と夏の絵に付された一首ずつ

山たかみくもるに見ゆるさくら花心の行きてをらぬ日ぞなき

(古今和歌集 賀 三五八)

めづらしきこゑならなくに郭公

ここの年のあかずもあるかな

(同 三五九)

を、新撰和歌においては前者を春部(四三)に、後者を夏部(一三九)に配する^⑭。新撰和歌が一切の詞書を有しないことも合わせ、これは同集が、どのような場で詠まれた歌かという基準を排し、何を詠んだ歌かという観点から編纂されていることを示すだろう。その新撰和歌では、たとえば、本稿の初めに例示した鶯の初音の歌であれば、

春やとき花やおそきとききわかむ鶯だにもなかずも有るかな

(新撰和歌 一三三)

花の香をかせのたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる

(同 一五)

雪のうちに春はきにけり鶯のこほれるなみだいまやとくらん

(同 一七)

梅がえにきゐる鶯はるかけてなけどもいまだ雪はふりつつ

(同 一九)

の順に配列されており、時間の逆行は生じない。また梅の花は、

梅のはな雪にまじりてみえずとも

かをだににほへ人のしるべく

(新撰和歌 一三六)

ゆきふれば木ごとに花ぞさきにける

いづれをむめとわきてをらし

(同 一三八)

のように、古今和歌集と同じく冬部においてすでに開花している様が描かれるが、春部に、

梅の花にほふはるべはくらぶ山

やみにこゆれどしるくぞ有りける (新撰和歌 九)

梅がえにきゐる鶯はるかけてなけどもいまだ雪はふりつつ

(同 一九)

春の夜のやみはあやなし

むめの花色こそみえね香やはかくるる

(同 二二)

と、初めから咲いているものとされていて、ここでも時間の逆行が解消されている。七夕歌についても、先に見たとおり時間は順行している。

新撰和歌の、このような、何を詠んだ歌かということを基準とする編纂の様相と対照すれば、古今和歌集四季部の、歌の披講される場に基づく構成が、いっそう鮮やかに浮かび上がってくると思われる。

ただ、この問題については更に多くの例をあげて検証する必要があるので、いずれ稿を改めて論じたい。

注

- (1) 和歌の引用は断らない限り新編国歌大観による。以下同じ。
- (2) 『古今集の構造に関する研究』(風間書房 一九六五年)に詳しい。
- (3) 注(2)に同じ。
- (4) 注(2)に同じ。
- (5) 田坂憲二氏「織女は立秋から牽牛を待つのか―『古今和歌集』七夕歌瞥見―」(香椎潟 第四六号 二〇〇〇年)が指摘するように、「秋風の吹きにし日」を「立秋」とする説が多いが、現実には七月七日以後に立秋となる年も多く存在するので、無批判にこれ

を「立秋」の日とすることにはためらいが感じられる。しかし一方、「秋風の吹きにし日」を「七月一日」とみると、古今和歌集春部の冒頭が「一月一日」ではなく「春立ちける日」から始まることとの整合性について説明しなければならない。無論、この「春立ちける日」は二十四節気の「立春」とは異なる概念である、という解釈ができるならば、整合性の問題は生じないが、従来そのように解釈する説は、管見の限り存しない。このように、「秋風の吹きにし日」をいつと断定するにはなお検討を要するが、古今集秋部においては、七月七日より何日か早い時点であることには違いない。

(6) 『新釈古今和歌集』による。

(7) 例えば、片桐洋一『古今和歌集全評釈』（講談社 一九九八）でも、七夕歌の区分は松田氏のそれと相違しているものの、①②③については「七夕の前」というひとつの主題のもとにまとめられたものとされる。また上平真由美氏『古今集』の七夕歌（茨城大学人文学部紀要 人文学科論集三四 二〇〇〇年）でも、②③を「七日の夜（牽牛はまだ来ていない）」とひとまとまりのものとするなど、②と③を別の主題、あるいは歌群に属するものとする説はなさそうである。

(8) 貫之集としては別系統に属する天理図書館蔵本にもこの二首が収められており、前者には「七月七日」後者には「七日夜」と、別の詞書が付される。このことから、この区別はもともとの屏風において存在した可能性が高いと思われる。

(9) 新編国歌大観所収の伊勢集は西本願寺本を底本とする。

(10) 西本願寺本と同系統の正保版本にもこれらの歌と同じものが載せられるが、二三番の歌の詞書は「七日」とある。本稿ではこの「七日」は「七月七日」を省略表記したものと考えている。

(11) 『古今和歌集評釈』（明治書院 一九四一年）

(12) 吉川英治氏「平安朝七夕再説」（和漢比較文学叢書 第十一卷（汲

(13) 古書院 一九九二年）に、「『万葉』で当事者の立場に立つものが全体の三分の二を占めるのにひきかえ、三代集では五分の一に過ぎず、…反面、第三者的詠が比率を増し…」とまとめられている。片桐洋一「古今和歌集の場」（『古今和歌集の研究』（明治書院一九九一年））

(14) この二首以外の定国四十賀屏風歌は新撰和歌に採られない。